

翻 訳

若きヘーゲルの宗教思想 (3)

——自由と疎外——

ポール・アスヴェルト 著

大 田 孝 太 郎 訳

本書の第一章および第二章の目次

序 論

第一章 修業時代—シュトゥットガルトとテュービンゲン (1770—1793)

- 一 時代の宗教的状況 (以上第一回目の翻訳)
- 二 若きヘーゲルのシュトゥットガルト時代 (1770—1788)
- 三 テュービンゲン神学校時代 (1788—1793) (以上第二回目の翻訳)

第二章 ベルン時代 (1793—1796)

第一節 改革家ヘーゲル

- 一 キリスト教教義の批判——キリストと宗教的疎外
- 二 『イエスの生涯』 (以上第三回目の翻訳)
- 三 イエスの宗教から教会制度へ

第二節 テュービンゲンの神学者たちとカントの宗教哲学

- 一 シュトールとカント
- 二 ジュースキントとフィヒテ

第三節 ヘーゲルとシェリングの往復書簡 (1794—1795)

- 一 1794年12月24日から1795年7月21日まで
- 二 哲学の原理としての自我に関するシェリングの論文
- 三 シェリングの自我に関する論文に対するヘーゲルの立場

第四節 ベルン時代最後の神学的断片

- 一 形而上学的疎外
- 二 摂理と奇蹟
- 三 実践理性の要請

第二章の結論 詩 エレウシス

第 二 章

ベルン時代（1793—1796）

ヘーゲルは1793年の秋に神学の学業を終えた。彼は説教者にふさわしい声も身振りも持ちあわせていなかったの、牧師になる道をあきらめたのである。その時から彼は教育職にたずさわることを考えたが、しかしどのような職を選ぶべきか未だよくわからなかったと考えられる。カントやフィヒテ、シェリングやヘルダーリン、その他多くの人たちと同じようにヘーゲルもどこかの富裕な家族の子弟の家庭教師を務めることに甘んじなければならなかった。若い家庭教師たちは、通常彼らの余暇を自己形成を仕上げるために費やすか、また特に彼らになんらかの道を開くことになるはずの著作の出版を準備するために費やしたのである。フィヒテやこの時代の多くのドイツ人たちと同様、ヘーゲルはスイスに赴き、この地のベルンで彼はフォン・シュタイガー家の家庭教師となった。この家族はこの町の貴族に列せられていた。ヘーゲルはそこでの自分の余暇を、一部は具体的な政治問題に充て、一部はテュービンゲンで形ができてきた問題で、われわれが第一章で素描した問題を明確にし発展させるのに充てているのである。彼は、カントの宗教哲学である『単なる理性の限界内における宗教』を注意深く読むことから——あるいは読み直すことから——始める。そしてヘーゲルの思想を1795年の終わりごろまで支配することになるのはカントが使う諸々の宗教的なカテゴリーである。改革家ヘーゲルを検討するのがこの章の第一節の主題となる。われわれはそこに宗教的疎外というテー

マが登場するのを見るであろう。しかしヘーゲルは宗教教育に意をもち、人間を正統派の独裁から解放しようとする一方、彼はカントの「批判」(Critiques) によって口火が切られた哲学運動にも早くから関心をもっている。われわれはヘーゲルがシェリングと交わした書簡に注目し、ヘーゲルが彼の友と連絡をとりあうことで如何にして人格神という考えを放棄するかを見るであろう。これは本章の第二節および第三節の主題となる。われわれはそこに、形而上学的疎外というテーマと呼んでもよいようなものが登場しているのを見るであろう。最後に第四節ではこの新たな観点に照らして、上に述べた思想が初めて現れる、ベルンで書かれた最後の部分(H. ノール、前掲書214-239頁)を解釈することにしよう。

(注)

- (1) ヘーゲルはここで、歴史および哲学に関する立派な蔵書、とりわけイギリスおよびフランス関係のものが多くある蔵書を自由に手にすることができた。この蔵書の内容についてはハンス・シュトラームが明らかにした。Hans Strahm, *Aus Hegels Berner Zeit. Nach bisher unbekannten Dokumenten*, dans *l'Archiv für Geschichte der Philosophie*, Bd. 41 (1932), pp. 514-533. —われわれの著者は外面は非常に実直な風を装って、極めて個人的な気質や容赦のない政治的な批評眼を押し隠したのである。彼は、ヴェルテンベルク公率いる啓蒙専制君主制ほどにはベルン市の貴族制を好まなかった。彼は1795年4月16日付けのシェリング宛ての手紙を次の言葉で始めている。「返事が遅れたのは、一つには仕事がいりあつたのと、いま一つは当地で行われた政治上の祝祭のために気分が落ち着かなかったからだ。十年ごとに大評議会 (*conseil souverain*) は、この間に辞職する約九十名ほどの議員を補充するのである。この時におこなわれることが如何に人間臭いものであるか、ここでおこなわれる癒着に較べれば、王侯の宮廷でたくらまれるいとこ同士のあらゆる陰謀も如何に取るに足りないものであるか、言うも愚かである。父が息子を、あるいはとてつもない持参金などをもって来る娘婿を任命する。貴族制を知るには、この補充がおこなわれる復活祭の前のこの冬を当地で過ごしてみなければならない。」ヘーゲルの最初の出版物となるのは、カル(Cart) という名前のローザンヌ出身の弁護士が書いた著作のドイツ語訳である。カルはベルンの寡頭政治によるヴァート地方の弾圧に抗して闘った人である。この翻訳書の題名はつぎのとおりである。 *Vertrauliche Briefe über das vormalige*

staatsrechtliche Verhältnis des Wadtlandes (Pays de Vaud) zur Stadt Bern; eine völlige Aufdeckung der ehemaligen Oligarchie des Standes Bern; aus dem Französischen eines verstorbenen Schweizers übersetzt und mit Anmerkungen versehen. Frankfurt am Main. In der Jägerschen Buchhandlung, 1798. 次の著書を参照。J. G. Meusel, *Das gelehrte Deutschland oder Lexikon der jetzt lebenden Deutschen Schriftsteller*, tome II, Lengo, 1805, pp. 328-329; J. Hoffmeister, *op. cit.*, pp. 247-257 et 457-465.

- (2) ベルンでヘーゲルが読んだ本および彼の政治上の諸論稿に関しては、すでに挙げたG・ルカーチの著作を参照すると有益だろう。本書は直接には宗教哲学を取り扱っているので、ヘーゲルがこの時期に読んだ次の書物には注意を促すだけにしておこう。Montesquieu, *L'Esprit des Lois*. Gibbon, *Decline and Fall of the Roman Empire*. G. Forster, *Ansichten vom Niederrhein, von Brabant, von Flandern, Holland, England und Frankreich, im April, Mai und Junius 1790*. これらの書物はシュタイガー家の蔵書の中にあるものであった。他にこの蔵書の中には、とりわけモスハイムの『教会史』、ヨセフスの『ユダヤ人の歴史』およびマリヴォーの小説が入っている。ヘーゲルがこれらの書物を読んだことはベルンで彼が書いたものから判る。

第 一 節

改革家ヘーゲル

ベルン時代の諸論稿——それはテュービンゲンであたためられた研究計画を遂行する中で企てられたものであるが——には、新しくてきわめて重要な要素が含まれている。事実ヘーゲルは、民衆の宗教の教義に必要な資格を吟味する過程で、キリスト教の教義とキリストの人格がそこで果たす役割を批判するようになるのである。彼は、このキリストの人格がそこで途方もない重要性を認められるのは如何にしてか、ということを自問するに到り、こうしてキリスト教の起源の問題へと導かれる。フランクフルト滞在の末期までヘーゲルはキリスト教の始まりとその後の変容に関する問題を立ち入って考えることになる。このような研究の過程で、彼は一般的な歴史的発展に関する自分なりの把握の仕方を見出すことになる。ヘーゲ

ル固有の宗教思想の秘密をわれわれに明らかにしてくれるはずのものがその後のさまざまな観方であって、かかる観方から彼はキリスト教の始まりとその運命を考察することになるのである。ベルンでヘーゲルは、非常に特異な性格をもった『イエスの生涯』を書く。個人の知恵を有し、ヘーゲルによれば当初自由な宗教であったキリスト教が、その後如何にして権威をもつ宗教に変容したのかを彼は研究する。彼はまたキリスト教が如何にしてギリシア・ローマの宗教にとって代わるようになったかを検討する。

以下のパラグラフでわれわれは、読者にヘーゲルがあちらこちらでとっているいくつかの「観方」をお目にかけようと思う。これらの観方は、疎外というヘーゲルのテーマが如何にして生じたかを明らかにしてくれるはずである。

一 キリスト教教義の批判——キリストと宗教的疎外

キリスト教徒の生を支配している考え方は——とヘーゲルは書く——永遠の救いという考え方である。この考え方はたしかに最高善という理性的な概念と比較対照することができるだろう。理性にとって最高善の条件は道徳性であるが、キリスト教徒にとって永遠の救いの条件はキリストへの信仰であり、人間と神とを和解させるキリストの死に対する信仰である。この信仰はそれ自身を目的とするものであって、道徳性へ導くためのものではない。この教義は、キリスト教の教え全体がそれを巡ってまわっている軸である。この教義がなによりもまず意味しているのは、人間は本性からして腐敗しているのであって、みずからの力では徳に到りつくこともできないし、救われるにも値しないということである。腐敗した人間が神の正義から期待するものは不幸と罰以外にはないであろう。人間の幸福は、まったく無償な神の恩寵のお蔭なのである。キリスト教の護教家たちをソクラテスの徳の模範や多くの異教徒、多くの汚れを知らない未開人の徳の模範と比較してみても、それに対して返ってくる答えは、それは「輝かしい悪徳」[glänzender Laster] にすぎない、という不愉快で哀れむべきもの

であって、「心なしの教父がたくらみ、おなじく心のからっぽな弟子たちがその教父の口まねをして、吐き気をもよおさせるような態度で喋りまくった」⁽²⁾代物なのである。キリスト教徒たちは、相互に関連のない聖書の中の幾つかの文言を拠り所にして、人間腐敗の教えや財産にたいする蔑視を表明している。彼らは、われわれの腐敗の肉体的原因、すなわち遺伝的形質 (hérité) すら聖書の中に見出されると信じている。こうして彼らは、人間をすべての罪から清めているのがわからないのである。というのは、自由のないところ、すなわち善なるものを承認して、それに従う能力を人間に拒むところでは、責任というものはあり得ないからである。

救いをキリストへの信仰に結びつけることは理性に反する、とヘーゲルは言う。歴史上の人物としてのキリストへの信仰は、実際のところ実践理性の要請ではない。この信仰は、ある歴史的伝承が現在のわれわれにまで伝えられたことによるのである。ところが理性が要求するのは、人間の存在がすべてそれに関わっている重大な問題の解決にあたっては歴史の偶然に左右されてはならないということである。だから選ぶべきは次の二つのうちの一つということになる。すなわち、罪を贖うキリストの死に対する信仰は救いのために必要であるが、しかしその場合、幸福から人間的なものの大部分を除き去り、理性を放棄し、神の道徳的性質について理性がわれわれに教えるすべてのものを放棄しなければならないか、あるいはまた、罪を贖うキリストの死に対する信仰は人が思うほどの重要性を持たないということを認めなければならないか、これら二つのうちのどちらかである。

人間腐敗の教義は、今度はキリストの神性の教義を生み出す。神一人のみが人間の罪を贖い、神聖性という価値ある模範を示すことができるのである。どのようにして、単なる人間が示す模範が、徳に到ろうと努めているわれわれを力づけ、われわれの内において感覚的なものを支配することを可能ならしめる神的火花を意識させることができるのだろうか。われわれの同胞が、われわれの肉と同じ肉、われわれの骨と同じ骨であるばかりではなく、われわれの精神と同じ精神、われわれの力と同じ力でもあると

いうことをわれわれが知るべくもないのはどうしてなのか。その理由は、キリスト教の教義が神聖性の理念を人間から完全に切り離し、この理念をはるか遠くの存在のために取っておくからである。この教義は、人間の本性の品位を貶しめ、最も徳ある人間の中に墮落した存在を見出すことしか許さないのである。ある人がわれわれにとって徳の理想のように思われるためには、その人は同時に神でなければならない。キリストに固有の神的な性格を、聖三位一体の第二の位格であって永遠なる父から生まれたという事の中に見出すのではなく、キリストの徳の中に見出すのならそれもよからう。しかし残念なことに事実はそのようにはいかなかった。教会の歴史は、例えば永遠の創造だとか、神的なもの与人間的なものとがキリストにおいて結びつけられるやり方だとかいった類の、およそ道徳とは係わりのない属性に関する血なまぐさい論争に満ちている。教義のこのような点が、宗教の本質的な事柄にされてしまい、民衆や統治者を駆り立てて反対派の口を封じ、力にものを言わせたり相手を牢獄にぶち込んだりして、その非を償わせようとした。こうして、キリストの人格——われわれの目に神的なものとして映じさせる当のもの——の本質が見過ごされてしまったのである。

そしてヘーゲルは次のように結論する。「もし、キリストは実はその受難のとき全世界の受けるべき罰をさえ耐え忍んだのだ、という馬鹿げた考え方を遠ざけようとして、神はこの受難とわれわれの罪の赦しとを結びつけておられたのだと、またわれわれの罪は神の恩寵の再来の条件だったのだと、ごく一般的に語るとしても、……人間がもしそのことを信じようとしさえすれば人間以外の存在の功績によって自分の罪を免れるのだ、という中心的な考え方がいまだ命脈を保っているのである。⁽³⁾」

この項を終わるに当たって、当時のヘーゲルの政治および宗教思想が表れている非常に特徴的なテキストを引用させてもらおう。「……〔古代文明の終末期に〕もはやいかなる公共の徳をもたない大衆、抑圧された状況の中で蔑まれて生きている大衆が必要としているのは、彼らにはとても軽

減することのできない惨めな境遇の補償を得んがための抛り所となる他のもの、他の慰めである。神と不死への信仰の内面での確信が、外部の保証によって、その確信をもっと知ることができるようにみずからの意見を起こすことを心得ていた人間たちを信頼することによって補わなければならない。みずからの民族の精神の中で、みずからの祖国のために力を尽くし、みずからの生命を費やし、それを義務からおこなった自由な共和主義者は、みずからの労苦に対する代償や補償を要求できるほどには、みずからの労苦を高く買っていない。彼が働いたのは、みずからの理念のため、みずからの義務のためであった。その働きと引換えに、彼は何を要求しなければならないのであろう。彼が期待するのはただひとつ、彼が勇敢だったからなのであるが、エルュシオンかワルハラで英雄たちの仲間入りをして生きることであり、そこのほうがここよりも幸福なのは、彼が弱い人間の苦しみから自由であるというだけの理由にすぎない。同様に、自然と必然への服従を原則としてみずからの理性の中に受け容れ、この法則を、たしかにわれわれにとって不可解だが、しかし神聖なものとして敬う人には、補償の要求の仕方が他にあるのであろう。オイディプスのような人物が、自分は宿命に服している、運命の支配を受けていると信じたからといって、自分のいわれのない受難に対する補償として、どのようなものを要求できるのであろうか。しかし、邪悪な人間の気まぐれへの盲目的な服従を原則とすることは、この上もなく墮落し、深刻な道徳的無気力に陥っている民族でなければならないし、そのようになりうるためには、よほどの時が流れて、現在よりもよかった状態が完全に忘れ去られなければならない。自分自身にも、またすべての神々からも見捨てられ、私的な生活を送るそのような民族には、しるしと奇蹟が必要である。この信仰をもちやみずから自身の内にもち得ない以上、自分に来生があることを神に保証してもらうことが必要なのである。とはいってもやはり、道徳性の理念を把握して、この理念の上に自分の信仰を打ち立てるところまでには到らない。理念が干からびており、いまや幻影と化しているのである。このような民族の信

仰は、ただ一人の個人（キリスト）にしか寄りかかれぬ。このただ一人の人物こそ、その民族にとって、その敬慕の対象たる模範なのである。——だからこそ、ローマ人の公共の徳が姿を消し、外面上の偉大さが衰えつつあった時代に、キリスト教が公然と喜び迎えられたのである。だからこそ、数世紀の後、人類が再び理念の能力をもつようになると、個人的なものへの関心が失われる。人間の腐敗についての経験は残りはするが、人間の墮落についての教説は衰える、……人間本性の美しさ、それをわれわれ自身が疎遠な個人の中へ〔*in das fremde Individuum*〕押し込んだのだが、その場合われわれは、人間の本性のうち、この本性がわれわれに吐き気をもよおさせかねない一切のものしか手もとに残しておかなかった。——この人間の本性の美しさという理念を、再びわれわれ自身の所産として、悦びの念をもってみとめ、それを再びわがものとし〔*es uns wieder aneignen*〕、そしてそうすることによってわれわれにたいする自尊の念を覚えるようになるのである。⁽⁴⁾というのも、われわれは以前には、みずから自身をもっぱら輕蔑の対象でしかありえないものと思ひなしていたにすぎないからである。」

「私的な生活を送る場合は、人生への愛——人生の安楽と人生の美化が、われわれの最大の関心事たらざるをえなかった。（かかる人生への愛が思慮という体系のうちに組み込まれたものが、われわれの道德であったのである。）いまや——道德的な理念が、人間の中に力を得ることができれば、かの財産の価値は下がり、ただ生命と所有物しか保証しない体制は決して最善のものとはみなされない。——幾千という多数の弱い人間が、そこに慰めを見出す、動機やら慰めの根拠といった危なっかしい仕組み全体、この作為的な体系は、いっそう不要なものとなる。常に時代と国家体制の色に染まり、卑屈になること、みずからの無能を意識することが最高の徳であり、どこか他のところから、一切のものを——一部は悪でさえも——待ち受けている宗教組織は、いまや独自で真の自立的な価値を獲得するであらう。⁽⁵⁾」

（注）

- (1) 以下のことに關しては、次の箇所を参照。Nohl, *op. cit.*, pp. 62-69.（久野昭訳『ヘーゲル初期神学論集Ⅰ』以文社、一〇四——一五頁。）
- (2) Nohl, *op. cit.*, p. 63.（同、一〇六頁）
- (3) Nohl, *op. cit.*, p. 69.（同、一一五頁）
- (4) ここではじめて、ヘーゲルにおいて疎外というテーマが、その後には再獲得という言葉を伴ってあらわれている。しかもそれは、ヘーゲルの成熟期の用語そのものを用いて表現されている。
- (5) Nohl, *op. cit.*, pp. 70-71.（同、一一八頁）。ヘーゲルが、厳密な意味で決してカント主義者でなかったことを Th. ヘーリングが強調するのは正しい。ここで引用したテキストから、ヘーゲルが、カントが使っている範疇を、カントとは異なった意味に「受けとっている」ことがわかる。しかし、「横の」関係がわれわれの直接の関心ではないので、われわれは、これらの相異を強調するにはおよばない。

二 「イエスの生涯」

（H. ノール、前掲書、75—136頁）

ヘーゲルがわれわれに残した最初のまとまった論稿は、イエスの生涯である。⁽¹⁾このテキストは極めて読みやすいものであるが、その文書上のジャンルを決めるのは容易ではない。まず、その若干の特色をあげれば次のとおりである。そこでは、キリストという人物は一切の超越的な性格を失っている。福音書が語る奇蹟的な出来事は、黙って見過ごされるか、または自然的な意味に解釈される。イエスはそこでは、徳の理想の人格化として、啓示によって受け入れられた外面的な律法に服することをみずからの支えとしているユダヤ人の宗教的感情と闘いながら、理性宗教を説く教師として現れる。「もし、あなたがたが、あなたがたの宗規と既成の掟を、人間に与えられている最高の法則であると考えているのなら、——とイエスはユダヤ人たちに言う——あなたがたは、人間の尊厳と人間の内にある神の概念と神の意志の認識とを、みずからの手で汲み取る能力を見誤っているのです。⁽²⁾」ラザロと冷酷な金持ちの話述べながら、ヘーゲルはアブラムに次のように語らせている。「人間には理性の法則が与えられている。

それ以外の教えは、天からもまた墓穴からも人間には与えられていない。⁽³⁾ 聖霊とは心情であり、道徳的な意識である。イエスが彼の使徒たちに教え込もうとするのはこの意識であり、それは彼の死後も使徒たちを導いてゆくべきものなのである。キリストの死は、彼の人格の中で理性宗教とユダヤ人の権威の宗教とを格闘させた劇の終幕である。そこではキリストの復活が問題なのではない。

この述作に関して、**理性の自由**というテーマに立ち入って述べることができよう。一見すると理性の自由について語ることは無意味であるようにみえる。というのも、理性とは通常は、真なるものに縛られた能力のことだからである。しかし、ヘーゲル——および自由思想家たち——が**思想の自由**について語るとき、彼らは理性が勝手気儘に肯定したり否定したりする権利があるとか、あるいはそうする能力さえもっていると主張しているのではない。彼らが**自由**という言葉で理解しているのは、**からの自由** (etre libre de) という消極的な意味においてなのである。からの自由といっても、それは何からの自由なのか。それは、**外部から**強えられるものからの自由である。理性とは、——とヘーゲルは『イエスの生涯』(H. ノール、前掲書、75頁、79頁)の中で言う——**神的火花**である。この火花を通じて、そしてこれを通じてのみ、神はわれわれを導くのである。われわれの進むべき道を照らすために、この神的火花を育みそだてる必要はない。ただそれに従いさえすればよいのである。

ヘーゲルのこの論稿の一般的な特色を述べた後で、その例証としてヘーゲルの解釈の具体的な例を若干あげても、おそらく読者には不愉快なことではないだろう。ヘーゲルの解釈が及ぶ範囲をすべて理解するためには、彼の具体的な解釈を、それに対応する聖書のテキストと比較してみなければならない。この聖書のテキストは伝統的なキリスト教の解釈に照らして理解されたもので、ヘーゲルが神学校で授けられた解釈と大筋において同じものである。われわれみずからがこの二つの解釈を並べてみるという作業をすれば当然われわれの研究をいたずらに長くしてしまうので、ヘーゲ

ルが典拠としている聖書のパラグラフをそのつど示すことで満足しよう。あとは読者の自主性と宗教的教養におまかせする。

ヨハネ福音書のプロローグは、次のように書き換えられている。⁽¹⁴⁾「どのような制限も受け付けられない純粋な理性は、神そのものである。——それゆえ、世界全体の計画は、理性によって立てられている。理性は、人間がその使命を知り、みずからの生における無条件の目的を知ることを教える当のものである。たしかに、理性はしばしば曇らされることがあるが、しかし、理性がまったく消し去られてしまうことは決してなかった。闇の中にあっても、理性のほのかな光は常に輝き続けていたのである。——」

「人間に再びその価値を気付かせた者は、ユダヤ人の中ではヨハネであった。人間の価値は人間にとって疎遠なものであるはずはなく、人間がみずからのうちに、自分の真なる自己のうちに求めるべきものであって、家柄がよいとか、幸福への欲求をもっているとか、名望ある人に仕えているとかいう点に求めるべきではない。そうではなくて、人間に与えられた神的火花、人間こそ崇高な意味において神そのものに由来しているのだというあかしを人間に与える神的火花の形成のうちに求めるべきなのである。——理性の形成こそ、真理と安静との唯一の源泉であり、この源泉をヨハネは、自分一人だけが、あるいはめったにないものとして、所有しているのだ主張したわけではない。そうではなく、すべての人間がみずからのうちにこの源泉を見出すことができると説いたのである。」

「けれども、人間の腐敗した生活原理を改めさせ、真の道德と純粋な敬神とを認識させるのに、ヨハネ以上に貢献したのは、キリストである。」

ヘーゲルは、イエスとニコデモとのやりとりを詳しく叙述している。⁽¹⁵⁾「私も——とニコデモは言った——あなたの教えを受けるためにやって来たのです。——というのは、私があなたから聞くすべてのことは、あなたが神の御使いであること、神があなたのうちに住みたまうこと、あなたが天から来られていることを、私にあかししてくれているからです。——そうです、とイエスは答えた、自分の源を天から得ていない者、神の力が、その

人のうちに住まっていない者は、決して神の国の住人ではありません。…人間そのものは、たんに、まったくの感性的であるにすぎない存在ではありません。——人間の本性は、たんに、快樂への欲求に限られているのではないのです。人間のうちには精神もあります。すなわち神的存在の火花もあるのです。あらゆる理性的存在者が受け継いでいるこの素質が人間には与えられているのです。たしかにあなたは、風がざわめくのを聞いて風が吹くを感じますが、しかし、その風について何もできません。それがどこからやってくるのか、あるいは、どこへ行くかもわからないのです。それと同じように、あの自立的で不変な能力も、抗いがたい力であなたの内面でその存在を知らせているのです。——しかし、その能力が他のものと、変化してやまない人間の心情と、どのようにして結びついているのか、それがどのようにして感性的な能力を支配するようになることができるのか——については、私たちは知りません。」——そして、ニコデモが、それは自分には分からない考え方ですと言うので、イエスは続けて言う。「どうしてですか。あなたはイスラエルの教師であるのに、私が言ったことが分からないのですか。——私のうちに、このことについての信念は生きています。それは、ちょうど私が見たり聞いたりするものを確信しているのと同じです。——しかし、もし、あなたがたが、あなたがたの精神の内奥のあかし、この天の声に注意を払わないのなら、どうして私が私のあかしにもとづいて、このことを信じてくれるようにとあなたがたに期待できましょうか。ただ、その源が天にあるこの声だけが、あなたがたに、理性の一層高い要求について教えることができますし、それに、ただ、この天の声を信じることによってのみ、この声によく耳を傾け従うことによってのみ、心の安らぎと真の偉大さ、人間の価値が見出されるのです。——というのも、神は他の自然よりもとりわけ人間を選んだもうたからです。それは、神がご自分の本質の反映を人間の魂の中に吹き込み、理性を人間におくり与えたもうたほどであります。——神を信じることによって、人間だけがその高邁な使命を果たすのです。——神は、自然の欲求をお罰しには

なりません。——だが、それを導き高めたまう。神に従わない者だけが、あの光を見誤り、あの光をみずからのうちに育むことをせず、こうしてその行為を通じて、どのような霊の子供であるかを示したことで、すでにみずからを裁いているのです。——彼は、倫理を義務として命じる理性の輝きを前にして後ずさをします。というのは、彼を恥辱と自己輕蔑と悔恨で満たすはずのあの光明に、彼の悪しき行いが反抗するからです。——しかし、みずから正しき行いをなす者は、すすんで理性の法廷へ赴きます…。——そして彼は自分の行為を包み隠す必要はないのです。というのも、その行為は、彼に魂を吹き込む精神、理性的世界の精神、神の精神をあかしするものだからです。」

ヘーゲルは山上の垂訓に多くのページを割いている。イエスはそこで、施し物をするときには、ラッパを吹き鳴らさないよう薦めている（マタイ、6、2—4）。右手のしていることを左手に知らせてはならない。隠れたことを見ておられる父は報いてくださるだろう。ヘーゲルはこここのところを次のように言い表している。「施し物をしようと思ったら、偽善者たちがするように、人々からほめられるために、街頭や説教壇の上や新聞紙上〔原文のまま！〕で、これみよがしに吹聴してはいけない。いわば、右手のしていることを左手に知らせないように、隠れてしなさい。——酬いられると思わなければ、あなたがたの励みにならないとしても、あなたがたの酬いは、よい行いをしたとひそかに思うことであり、世間の人がよい行いをした当の本人をほとんど知らなくても自分たちの行いの効果は……永遠に悦ばしい結果に満ちあふれているのだと思うことなのです。」——福音書（マタイ、6、19—21）の中ではまた、地上にではなく天国に宝をたくわえなければならないと言われている。ヘーゲルは、それを次のように言い換える。「あなたがた自身の内に移ろいゆくことのない宝を、道徳性の宝をたくわえなさい。このような富だけを、あなたがたは本当の意味で自分のものと呼べるのです。というのも、それはあなたがたの最も内奥にある自己に所属しているからです。——自然の強制、あるいは人間の悪し

き意志、また死でさえもこの富に対しては無力なのです。⁽⁷⁾」

ヨハネ福音書は、安息日に足の不自由な人が癒され、そしてその後に交わされた会話について記している（ヨハネ、5、1、以下）。ヘーゲルは、このエピソードを語るのに次の言葉で始めている。「さて、再び過越の祭があったので、イエスもエルサレムに赴いた。イエスがエルサレムに滞在しているある時のこと、彼が安息日に、ある貧しい病人に親切をつくしたところ、それがユダヤ人たちの感情をいたく傷つけたのである。⁽⁸⁾」——そのときのやりとりの中で、ヘーゲルのキリストは言う。「人間が自我と呼ぶことができるもの、そして死滅や腐敗することは決してなく、人間みずからが受けるに値する酬いを決定するところのものは、自分で自分の方向を定めることができます。そのものは、理性として姿を現してきますが、この理性の立法は、もはや理性以外のなにものにも依存しません。——地上のものであろうと天上のものであろうと、いかなる他の権威も、この理性の手に、その方向を定めるべき他の尺度を与えることはできないのです。私が教えていることを私の思いつき、私一人の考えだと言うつもりはありません。私はそれを、誰かが私の権威に基づいて受け入れることを求めているわけではありません。というのは、私は名声などほしくはないからです。——（それを信じるかどうかを、私は、すべての人を意のままに支配しているとおもわれる普遍的理性の判定にゆだねます。——）⁽⁹⁾」

福音書はイエスがあるとき罪深い女の罪を許した次第を語っている。この女はイエスの足に香油を塗り、イエスの足を自分の涙で濡らしていたのである。『イエスの生涯』の中でキリストは言う。「あなた自身の、まだ善をなし得るという信仰とあなたの勇気とが、あなたのうちで勝利をおさめたのを見るのは、すばらしい楽しみです。⁽¹⁰⁾」

「多くの聴衆の中からイエスは、いまや特別に教えるに値すると思っていた十二人の者を選び出した。それは、彼らを立派な人間にし、自分の教えを広める手助けをしてもらうためであった。そしてイエスは、ひとりの人間の生涯と力だけでは、国民全体を道徳的なものに向けて教育するのに

は不十分であることを、分かりすぎるほどわかっていたから、——彼にはその精神をそのまま吹き込むことができる何人かの人が必要であつた。⁽¹²⁾」

さらにまた極めて興味深いのは、仮庵の祭に行ったとき、イエスがパリサイ人たちと言ひ合つたことに関するヘーゲルの伝え方である(ヨハネ、8、12、以下)。「いつか別の折りに、イエスが神殿で人々の前で話をしていると、パリサイ人たちが反対して、あなたは自分の教えが真理であることを、あなた自身にも他人にも保証できるようなどんなしるしを示すことができるのか。自分たちは、神の厳肅な啓示によって正当と認められている制度と律法をもつという幸福にめぐまれているのだ、と言つた。イエスは彼らに答えて言つた。あなたがたは、神は人類を世界の中へ投げ入れ自然の手にまかせたもうたとても信じているのですか。法則もなく、彼らの生存の最終目的の意識もなく、どうすれば神の意にかなうことができるかをみずからの内に発見する可能性もないのに。⁽¹³⁾——道德法則の認識は幸運の問題であつて、それは、地上のあらゆる国民のうち、もっぱらただあなたがただけに、地上のこの片隅にだけ、理由はわからないが、分かち与えられているのだとてもあなたがたは信じているのですか。——あなたがたがそのように信じ込むのは、あなたがたの頭の中にある利己的なものの狭い見なのです。——私は、ただ、自分の心、自分の良心の偽りのない声だけをたよりにしているのです。この声に正直に耳に傾ける者には、この声から真理が輝きでるのです。——この声を聴くこと、私はただそのことだけを私の弟子たちに求めているのです。この内なる法則こそ、自由の法則であり、自分自身が与えたものとしてのこの法則に、人間はみずから進んで従うのです。この法則は永遠です。この法則の内には、不死の感情があります。——人間にこの法則を知らせるという義務のためなら、私は、誠実な羊飼いがその羊の群れのためにそうする覚悟ができてるように、生命を捨てる覚悟ができています。——あなたがたがたとえ私の生命を奪つても、あなたがたは私から生命を奪い取るのではなくて、私自身が自由に生命を犠牲にするのです。——あなたがたは奴隷であります。なぜなら、

あなたがたは外からあなたがたに課せられる律法、それゆえあなたがたを、あなたがたみずからに対する尊敬の念によってさまざまな愛着心に奉仕することから救い出してくれるような力をもたない律法という縛めを背負っているからです。」⁽¹⁴⁾

福音書（ルカ、12、49—53）の中で、イエスは、この地上に平和ではなく剣と迫害をもたらすために来たのだと言っている。ヘーゲルはイエスに次のように語らせている。「私があなたがたに安穏な生活を楽しむように求めたとでもあなたがたは思っているのですか。苦勞のない幸福な未来こそ、私が自分のために期待し要求している運命だとでも思っているのですか。そうではありません。迫害を受けることこそ私の運命であり、あなたがたの運命でもあるのです。不和と闘いこそ、私の教えから出てくるものでしょう。悪徳と徳のこの争い、そしてなんらかの権威によって人間の頭や心に植えつけられてきた信仰上の因襲的な考えや慣習に服するか——それとも、権利を認められた理性に奉仕するという今再び姿を現しつつあるものに立ちかえるか——この争いは、友人や家族を引き裂くでしょう。——もし、古いものが理性の自由に足かせをはめ、倫理のこの源を汚したと言って、古いものをくつがえした人たちが——そのかわりに再び文字に縛られ外から命令される信仰、理性みずからが法則を創りだし、自由にその法則を信じ、その法則に従うところの権利をあらためて理性から奪い取る信仰、をもち出すようなことがあれば、ああ、もし、彼らがこの命令された信仰を、剣や外部の力でその身を固めさせ、父親を息子に、兄弟を兄弟に、母親を娘に対してけしかけ——そして、人類を人類の裏切り者にするようなことがあれば、この争いは、人類の中のかなりの人たちには名誉になるでしょうが、しかし、その争いは不幸なものとなるでしょう。」⁽¹⁵⁾

自分の持っているものを売り払ってイエスに従う決心をつきかねている若い金持ちの逸話はよく知られている。⁽¹⁶⁾ このエピソードは、イエスが弟子たちにした約束、すなわち、人の子（イエス）が栄光の座につく日に、弟子たちも十二の玉座にすわり、イスラエルの十二の支族を裁くであろうと

いう約束で終わっている。そしてイエスは付け加える。私の名のゆえにすべてを捨てる者はだれでも、この世ではその何倍もの酬いを受け、後の世では永遠の命を受けるのです、と。ヘーゲルはイエスに次のように語らせている。「富への愛着が、いかに人間の心をかんじがらめにすることができることか。それが人間にとって、徳へ到りつくためのなんと大きな妨げとなることだろう。徳は犠牲を要求し、富への愛着は常に新たな利得を要求する。徳は——みずからを限りあるものとする——ことを、富への愛着は——自らを押し拡げること——自分のものと呼べるものをますます多く増やすことを要求する。」弟子たちは尋ねる。「しかし、この人間の本性から生ずる欲求のゆえに有徳たり得ない、ということはどうして望めましよう。」これに対してイエスは答える。「これらもろもろの欲求の間の矛盾は、神が富への愛着よりも優位に立つべき義務を課する独自の立法権を徳に与えたまい、また富への愛着よりも優位に立つことができる力をも徳に授けたもうたという事情によって解消するのです。」——そして、「彼の仲間の一人」であるペテロが、「知ってのとおり、私たちは一切を捨てて、……あなたの教化に身をまかせ、ただ倫理にのみ献身してきました」と言うと、イエスはそれに応えて言う。「あなたがたが捨て去ったものと引き換えに、あなたがたは、ただ義務のためにのみ生きたのだという意識を獲得しました。この意識こそこの人生においても、それからまた未来永劫にわたっても十分な代償なのです。」⁽¹⁷⁾

ヘーゲルは、最後の晩餐の後に交わされた会話に長く足を止めている。⁽¹⁸⁾
「諸君、あなたがたの友は、まもなくその使命を終えるでしょう。——彼を、人の子の父がその至福の住処に受け入れたまう。もう少したてば、私はあなたがたと別れることになるでしょう。あなたがたへの遺言として、私はあなたがたに、互いに愛し合いなさい、という命令を残しましょう。そして、私のあなたがたへの愛という手本を残しましょう。……私があなたがたと別れるからといって、狼狽してはなりません。——あなたがたの内にある精神を崇めなさい。この精神によって、あなたがたは神の意志を

知り、この精神によって、あなたがたは神と通じ、神と同類なのです。……これまで私は、あなたがたの教師でした。……いま私は、あなたがたのもとを離れるとはいっても、あなたがたを孤児としてあとに残すわけではありません。私はあなたがたに、あなたがた自身の内に導き手を残します。理性があなたがたの内に蒔いた善の種子を私はあなたがたの内に呼びよしました。そして、私の教えとあなたがたに対する私の愛を思い起こしてくれるなら、この真理と徳の精神は、あなたがたの内に歪められることなく保たれるでしょう。この精神に人間が敬意を表さないのは、彼らがこの精神のことを知らず、また、みずからの内にこの精神をさがし求めようとしないからにすぎません。——あなたがたは大人になったのです。大人は、他の人からあんよ紐を貸してもらわなくても、最後には、自分のことは自分に任せられるのです。——私がもはやあなたがたのもとにいても、これからはあなたがたが育んできた倫理が、あなたがたの道案内をしてくれるのです。……徳の聖なる精神が、あなたがたが道を踏み誤らないように守ってくれるでしょう。——それは、あなたがたが、いまはまだ感じ取っていないものを、もっと完全にあなたがたに教え、あなたがたが、いまはまだ分からない多くのことを、あなたがたに思い起こさせ、その意味を分かせてくれるでしょう。……いま、あなたがたは私のまわりにいます。あなたがたは、葡萄の木から養分をとって、果実をつけた葡萄の若枝のようなものです。そして、この若枝が、いまずぐ木から切り離され、自分自身の生命力によって善の実を熟成させるのです。⁽¹⁹⁾

最後にヘーゲルは、聖職者の祈りを次のように言い換えている。「わが父よ、私の時が来ました。——無限なあなたをその源とする精神の尊厳を見せるべき時が。——そしてあなたのもとへ帰るべき時が。永遠であること、始めと終わりのあるものの一切を、有限なものの一切を越えて高まりゆくことこそがこの精神の定めであります。——父なるあなたを認識し、私の精神とあなたが同じ類のものであることを認識すること、類を同じくするというに忠実であることによって私を崇めること、そして、この尊厳

に目覚めた意識を通じて人間を高めることが、この地上での私の使命でした。——地上でのこの使命を私は終えました。——あなたへの愛のゆえに私は友人たちを得ました。彼らは悟るようになったのです。私が人々に縁もゆかりもないものを、あるいは自分勝手なものを押しつけようとしているのではなく、私が彼らに教えたのは、あなたがお示しになった法則であって、その法則は人々が見誤っているだけで、すべての人の胸の奥にひそかに宿っていることを。何か奇妙なこと、あるいは突飛なことによって名誉を得ることではなく、蔑まれた人間性に対する失われた尊敬の念を回復することが、私の意図だったのです。——そして理性的存在者の普遍的性格、すべての人に与えられた徳への素質——それが私の誇りでした。」

『イエスの生涯』の文書上のジャンルはどのようなものなのか。ヘーゲルがイエスの生涯に関して、事実にもとづく正確な知識をわれわれに与えようとしているのではないことは確かである。このことは、既成の宗教としてのキリスト教の起源に関する論稿を読めば分かる。この論稿については次の節で述べることにする。ヘーゲルがわれわれにしようと思っている説明は、イエスの生涯の中の語る価値のない部分を「取り除いた」ものなのだろうか。ヘーゲルの説明はわれわれにとって、もはや価値をもたないものをイエスの生涯全体から取り除き、イエスが実際的な利益を与えてくれるものだけを、つまりイエスがわれわれにも手本として役立ち得るものだけを残しておこうとするものなのだろうか。けっしてそうではない。というのは、ヘーゲルが聖書のテキストが描いているイエス像の中の語るべき価値のない部分を取り除いただけではなく、聖書のイエス像を書き改めた、つまり意識的に書き改めた (*transformé*) ことは明らかであるからである。彼のなそうとしたことは、一つの実験を試みることである。ヘーゲルは若き改革家として、自分が夢見る民族宗教〔Volksreligion〕の必要に応じる「イエスの生涯」を創作しようとしたのである。そこでは、歴史上のキリスト自身は少しばかり、意識的に手を加えられて (*réformé*) いる。

このベルン時代のヘーゲルは、歴史上のキリストをどのように考えている

のだろうか。ヘーゲルは福音書の著者たちや聖パウロが彼らの主について語ったことをすべて真実であるとは決して考えてはいないことは明らかである。ヘーゲルの考えでは、イエスは他の人たちと同じ一人の人間であった。イエスは、自分が聖三位一体の第二の位格であって、墮落した人間を神と和解させるために人となったのだとは決して主張しなかった。彼は、救いを自分の人格に対する信仰に結びつけようなどという気持ちは少しもなかった。彼は、神の命令によって一連の秘教的な教えを口にしたり、一連の秘儀を見せつけようなどとは思ってもよらなかったし、また、それらの教義や秘儀を力づくですべての人に強要するなどということも思ってもみなかった。彼は、現存する宗教組織に至る所でとって代わろうとする一つの宗教を創始するとは決して主張しなかった。すべての人に答えを与え、民衆の公的生活を支配するはずの道徳的規範を伝授しようなどとは彼は夢にも思わなかった。彼の道徳は、もっぱら個人的な知恵にとどまるものであり、それ以外のものを求めなかったのである。不幸のはじまりは、イエスの弟子たちが絶対的なものに一切を与えたことであった。彼らは自分たちの主を神格化し、イエスに多少とも関わりのあるものを受け容れることを救いの条件にしてしまったのである。このような変化はどのように説明すればよいのであろうか。

(注)

- (1) D. D. ロスカの手になる『イエスの生涯』のフランス語訳がある。Hegel, *Vie de Jésus*. Traduit et précédé d'une introduction par D. D. Rosca. Paris, 1928.
- (2) Nohl, *op. cit.*, p. 89. (久野昭訳『ヘーゲル初期神学論集Ⅱ』以文社, 三〇頁)
- (3) Nohl, *op. cit.*, pp. 111-112. (同, 六六頁)
- (4) Jo., I, 1-18; Nohl, *op. cit.*, p. 75. (同, 九頁)
- (5) Jo., III, 1-21; Nohl, *op. cit.*, pp. 79-80. (同, 一五—一六頁)
- (6) Nohl, *op. cit.*, p. 84. (同, 二三頁)
- (7) *Ibid.*, p. 85. (同, 二五頁)
- (8) *Ibid.*, p. 88. (同, 三〇頁)
- (9) *Ibid.*, p. 89. (同, 三〇—三一頁)

- (10) *Lc.*, VII, 36-50.
- (11) Nohl, *op. cit.*, p. 92. (同, 三五頁)
- (12) Nohl, *op. cit.*, p. 90. (同, 三三頁)
- (13) ヘーゲルは注意書きで、ゲーテの言葉を引いている（『イフィゲーニエ』第五幕三場）。「生の泉が、なんの混じりけもなく胸の中に流れている者なら、誰もがそれを認めています。」
- (14) Nohl, *op. cit.*, pp. 97-98. (同, 四四—四五頁)
- (15) Nohl, *Ibid.*, pp. 105-106. (同, 五七頁)
- (16) *Lc.*, XVII, 18 et suiv.
- (17) Nohl, *op. cit.*, pp. 113-114. (同, 六九—七〇頁)
- (18) *Jo.*, XIII, 31-XVII; Nohl, *op. cit.*, pp. 125-127. (同, 八七—九〇頁)
- (19) *Jo.*, XV, 4, 6. 「葡萄の枝が木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、私につながっていなければ、実を結ぶことができません。……私につながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れてしまうのです。」
- (20) 注釈者たちも、この点で見解が一致している。彼らの意見が別れるのは、われわれが取り扱っている論稿の各ページごとに現れていると言ってもよいカント主義をヘーゲル自身どこまで共有しているのか、さらにまたこの論稿にはカント以外の人の影響が見られるか、という点を正しく認識しているかどうかという問題に関わっている。